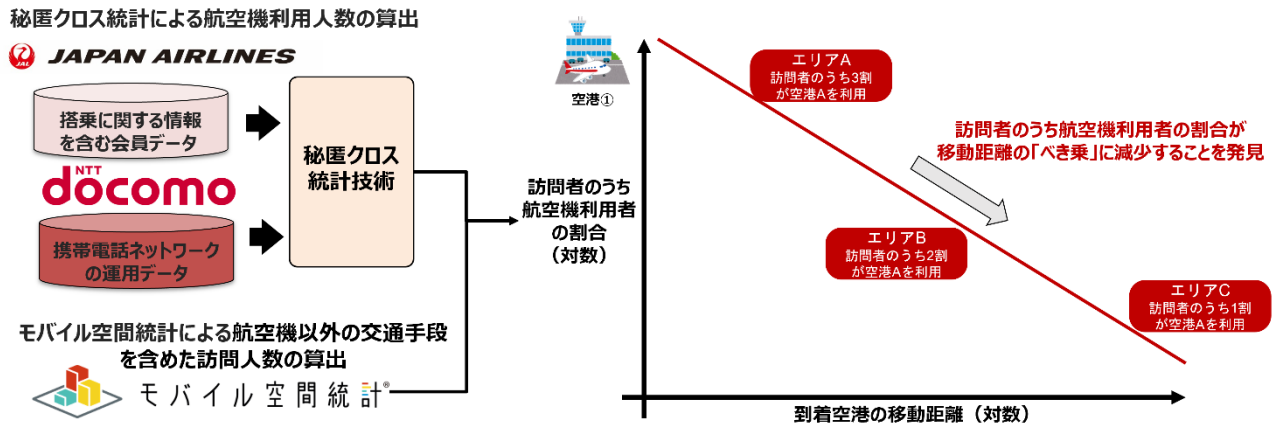


本実証実験で得られた知見

地域活性化のためには、移動の利便性の向上により、広範囲な移動を促す効果が期待されるエリアの特定が重要ですが、これまでそのようなエリアの選定は困難でした。そこで、秘匿クロス統計技術を活用し、航空機を降りた後、航空機に乗っていた人々がどこを訪問するのかを明らかにしました。これにより、空港から周辺地域への交通二重の大きさが定量的に分かるようになり、空港からの二次交通の整備を移動の実態に基づいてきめ細やかに充実させられることが期待されます。また、モバイル空間統計で分かる航空機以外の交通手段を使った訪問者数も併せて確認することで、それぞれのエリアを訪問する人のうち、どのくらいの割合の人が航空機を使い、それらの人々がどの空港を利用するのか、という分析も行いました。

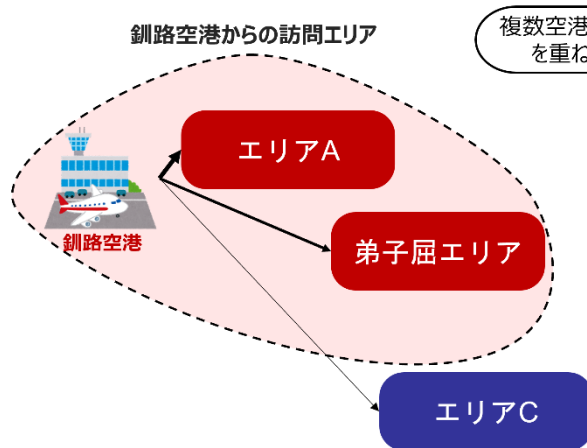
その結果、空港から遠くなるにつれて航空機を使う人の割合は減少していく「べき乗則」と呼ばれる物理学における距離と重力の関係を表す法則に類似した関係に従うことが分かりました。

各エリアの訪問者のうち航空機利用者の割合把握

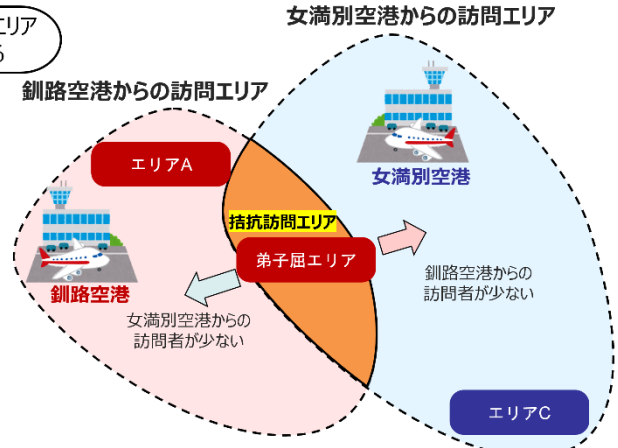


さらに、どのエリアがどの空港を利用するのかの関係性も明らかになり、複数空港の航空利用者割合が拮抗するエリアも浮かび上がってきました。道東エリアでは、釧路空港と女満別空港の訪問エリアは、摩周湖などが位置する弟子屈エリア周辺で拮抗し、そこが「釧路空港圏」と「女満別空港圏」の「拮抗訪問エリア」となることが分かりました。

道東空港からの訪問エリアを把握



道東エリアにおける拮抗する訪問の発見



この拮抗訪問エリアは、どの空港を一番利用しやすいかをわける「分水嶺」に相当するものであり、このエリアを越えて移動するような観光施策を実施することにより、単に空港との間を往復するだけではない、広範囲の周遊を促すことで、効果的な人流の活性化に寄与すると考えられます。

人流創出による地域活性化は、他の地域でも社会課題となっており、他地域のさまざまな交通手段にも本手法を適用することで、着目すべきエリアを効果的に把握することができ、日本全体の地域活性化に貢献することが期待されます。

異なるエリア間での広範囲の移動

